令和６年度　岡崎市教育研究大会リポート

１　| 19 | 総合的な学習 |

岡崎市立生平小学校　　杉本智恵

２　研究テーマ

身近な環境に主体的に関わり、よりよい環境について考え、行動できる子供の育成

―３年　総合的な学習の時間「セキレイのすむ町　すてきな生平」の実践を通して―

３　研究概要

（１）主題設定の理由

本校は、全校で愛鳥活動に取り組んでいる小学校である。そのため、本学級の子供たちも野鳥愛や野鳥を守っていきたいという意識はとても高い。しかし、野鳥と自然環境との関係や人間の生活との関わりなど、背景にある要因や環境変化などにあまり考えが及んでいない現状があった。SDGｓが叫ばれ、学校教育においても持続可能な自然環境の形成や社会づくりについて考え、行動していくことができる子供の育成が求められている。本校においても、単なる野鳥調査や野鳥保護で終わるのではなく、愛鳥活動を窓口にして、野鳥調査から自然環境や人間の生活との関わりを見つめ、持続可能な自然環境を目指して、よりよい自然保護や環境保全のあり方について考え、行動していく総合的な学習（本校では「ふるさと学習」と呼んでいる。以下ふるさと学習）を創っていきたいと考えた。

そこで、３年生の子供たちに、セキレイを題材にして、３種類のセキレイの分布調査から身近な自然環境を見つめ、よりよい自然環境のあり方について考えを深め、自分達ができる環境保全に取り組んでいくことができる子供を育てていきたいと考えた。

（２）研究の仮説と手だて

○目指す子供像

・身近な自然環境について関心をもち、課題を見つけることができる子供
・自ら進んで追究し、よりよい自然環境のあり方について深く考えることができる子供
・地域の自然環境の現在や未来に思いをよせ、自分達ができる環境保全に取り組んでいくことができる子供

○仮説と手立て

＜仮説１＞ふるさと学習の単元の始まりに、愛鳥活動を窓口にした体験活動の位置づけや地域の人と共に取り組む野鳥の分布調査を行えば、身近な自然環境について関心をもち、課題を見つけることができるだろう。

【手立て１】愛鳥活動を窓口にした体験活動の位置づけ
・ターゲットバードであるセキレイについて調べ、学校や身近な場所のセキレイ分布調査を実施する。

【手立て２】地域の人と共に行う野鳥の分布調査
・学区の老人会や全校児童に協力をお願いし、学区全体の３種類のセキレイ分布調査を行う。一月ごとの生息分布の状況を調べる。
・分布図から分かることを話し合い、それぞれのセキレイの生息状況と特徴について考察する。

＜仮説２＞ふるさと学習の追究過程で、専門家講師への聞き取りの場の位置づけやタブレット端末（iPad）を活用した意見交流の工夫を行えば、自ら進んで追究し、よりよい自然環境のあり方について深く考えることができるだろう。

【手立て３】専門家の講師への聞き取りの場の位置づけ
・個別追究で生まれた疑問や、調べたことに関することについて聞き取りを行う。

【手立て４】タブレット端末（iPad）を活用した意見交流の工夫
・調べ学習で得た情報をタブレット端末（iPad）の授業支援クラウド（スクールタクト）で共有し、いつでも確認できるようにする。

＜仮説３＞ふるさと学習の単元の終わりに、社会的発信活動の場や１年間の振り返りの場の設定をすれば、地域の自然環境の現在や未来に思いをよせ、自分達ができる環境保全に取り組んでいくことができるだろう。

【手立て５】社会的発信活動の場の設定

・追究過程で交流した市役所環境政策課の職員の方に自分たちの制作したセキレイ新聞を持って行き、セキレイを守るための自分達の考えを提言する。

【手立て６】１年間の追究活動の振り返りの場の設定

・１年間を通して行った自分たちの追究活動を振り返り、これからの自分達の取り組みについて考えをまとめる。

○単元計画

「セキレイのすむ町　すてきな生平」（４７時間完了）総合３５　理科２　社会３　国語５　算数１　道徳１

○学区どんな場所にどんなセキレイがいるのか調べよう(12 時間)

・セキレイの違いを調べ学校のセキレイマップを作成する	①～④	【手立て１】
・老人会の方や全校児童に協力を依頼し、調査する	⑤～⑩、随時	【手立て２】
・調査から分かったことをまとめ、振り返りを行う	⑪、⑫	

○どうして市の鳥が「ハクセキレイ」なのだろう(19 時間)

・自分のテーマを決めて岡崎市とハクセキレイの関係を調べる	⑬～㉘	【手立て４】
（もっと知りたいことを専門家の方に聞く	㉑、㉒)	【手立て３】
・分かったことから考えをまとめ、発表する	㉙～㉛	

○セキレイを守れるように多くの人に伝えよう(16 時間)

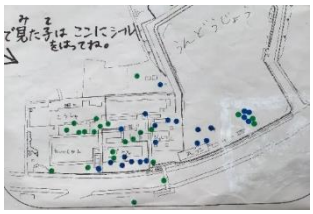
・「ふるさと学習まとめ発表会」で地域の方に伝える	㉜～㊲	
・市役所の環境政策課に提言に行く	㊳～㊺	【手立て５】
・一年の活動を振り返る	㊻、㊼	【手立て６】

○検証の方法について

抽出児童Ａ、Ｂを中心に変容を追跡することで手立ての有効性について検証する。抽出児Ａは、野鳥を見つける場所が身近な行動範囲内に限られている。そして、経験から考え自発的に調べようとはしない。また、学区の人との関わりは受け身的である。抽出児Ｂは、個別学習を根気強く続けることが苦手で、追究を途中であきらめてしまう。また、分かったことを友達にうまく表現できずに終わってしまうことが多い。本単元を通して、児童Ａは、視野や興味の幅を広げて追究を続け、自ら進んで環境保全に取り組んでいく姿を、児童Ｂは、見つけた課題を根気強く追究し、分かったことや自分の考えを多くの人に自信をもって発信していく姿を期待する。

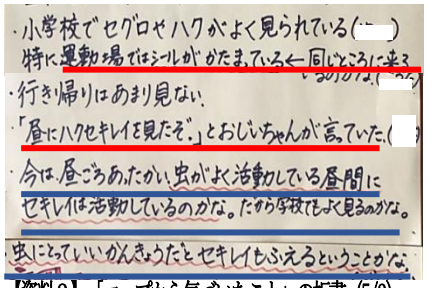
（３）実践

①愛鳥活動を窓口にした体験活動の位置づけ（手立て１について）

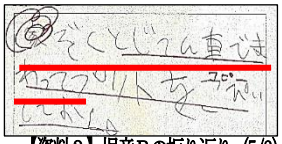


【資料1】校内のセキレイマップ（4/15～4/28 実施）

本校の児童は１年生の頃から野鳥を探し、ウォッチングカードにかいているため、ターゲットバードである３種類のセキレイについて見分けがつく。しかし、セキレイについて知っていることを尋ねると、体の色や大きさは答えたが、どこにいるのか、どんなことをしているのかなど、詳しいことは知らなかった。そこで校内でのセキレイ調査を実施し、セキレイがどの場所にいるのか調べることにした。


・小学校でセグロやハクがよく見られている(　　)
特に運動場ではシールがかたまっている←同じところに来る
・行き帰りはあまり見ない。
「昼にハクセキレイを見たぞ。」とおじいちゃんが言っていた(　　)
今は昼ごろあたたかい。虫がよく活動している昼間にセキレイは活動しているのかな。だから学校でもよく見るのかな。
虫にとっていいかんきょうだとセキレイもふえるということかな。
【資料2】「マップから気づいたこと」の板書（5/2）

セキレイを見つけたら、校内の地図にハクセキレイは緑、セグロセキレイは青、キセキレイは黄色のシールを貼るようにした（資料１）。児童Ｂは資料２の赤線部分のように、運動場のシールが集まっていることに着目し、何日にも渡り、じっくりと観察することで、同じ場所に繰り返し飛来してくる事実を掴んだ。また、児童Ｂは家族の気付きを学級で伝えており、家族でも話題にするほど興味をもっていることが分かる。そして、その発言から、児童Ａは青線部分のように学校でよく見たという事実を餌になる虫と関係づけて考えることができている。さらに児童Ｂは話し合い後の振り返り（資料３）で「かぞくとじてん車でまわってプリントをこぴいしておく」と書いており、学区地図をコピーしたものを用意して家族と地域の調査も自主的に始めようとしていることが分かる。


かぞくとじてん車でまわってプリントをこぴいしておく。
【資料3】児童Ｂの振り返り（5/2）

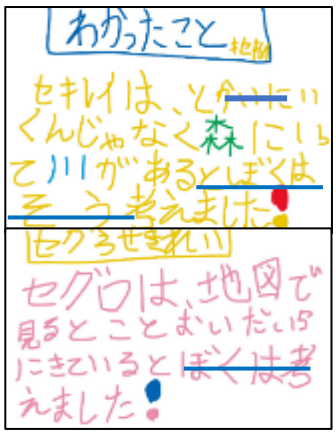
単元の始まりに、自分達でできる学校内のセキレイ分布調査を行ったことで、セキレイをじっくり観察したり、野鳥と餌である虫との関係に気付くようになったりして、身近な自然環境に目が向き始めた。また、家族の協力で、さらに意欲的になり、学校外の野鳥調査へのやる気も高めることができた。

（２）地域の人と共に行う野鳥の分布調査（手立て２について）

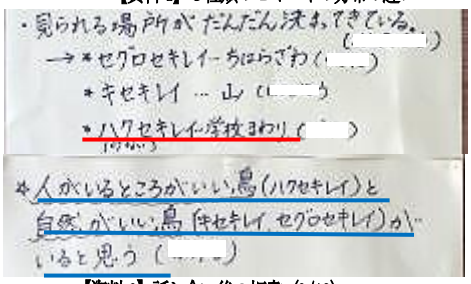
資料３の児童Ｂのように、地域に生息するセキレイに目が向くようになり、学区セキレイ調査を早く行いたいとの声が上がってきた。そこで、学区の生息分布状況を調べることにした。しかし、本学級の児童は７名であり、広い学区には、児童が住んでいない地域もある。さらに、資料２のように子供たちは昼間の調査が大事だと考えていた。そこで、全校児童だけでなく老人会の方に調査の協力をお願いし、学区の正確な分布状況が分かるようにした。

全校児童への協力依頼は、全校行事「ふるさと学習テーマ発表会」で行った。「３年生が住んでいない、築野と古部の人は積極的に貼ってください。」と協力を依頼した。また学区の老人会の方たちを学校に招き、調査を依頼した。

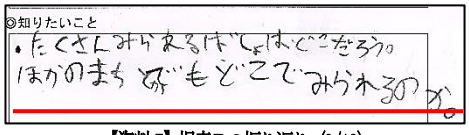
【資料４】３種類のセキレイの分布の違い



【資料５】児童Ａのスクールタクトへの書き込み (9/12)



【資料６】話し合い後の板書 (9/12)



【資料７】児童Ｂの振り返り (9/12)

６～８月の得られた調査結果を、種類ごとの分布図にして全員で見比べた（資料４）。児童Ａはキセキレイは「森」と「川」がキーワードであることに気付く（資料５）。セグロセキレイについては「おいだいら」と大まかな捉えであったが、資料６のように「ちはらざわ」や児童Ｂの「学校周り」など具体的な地域についての話が出てくると、その地域の人家の様子や自然環境との関わりで分布図を見て「人がいるところがいい鳥（ハクセキレイ）と、自然がいい鳥（キセキレイ、セグロセキレイ）がいると思う」と考察し、学区に限定するのではなく、一般化してセキレイの生態を捉えた。そこから児童Ｂは「ほかのまちとかでもどこでみられるのか」（資料７）と学区外についての課題を見出すことができた。

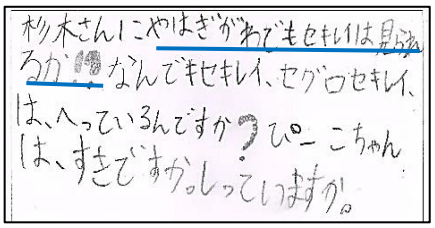
老人会の方や全校児童とともに分布調査を行ったことで、３種類のセキレイの生息分布の違いが明確化された。そして、セキレイの生態について自分の考えをもち、学区から視野を広げるような新たな課題を抱くようになった。

（３）専門家の講師への聞き取りの場の位置づけ（手立て３について）

学区から視野を広げ、岡崎市の鳥がどうしてハクセキレイなのか、予想を立て、個別に調べる活動を行った。そして、追究の過程で生まれた疑問を専門家の講師へ聞き取りをする場を設けた。

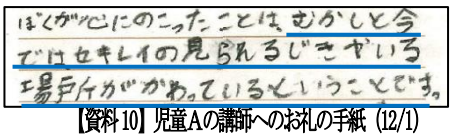
【資料８】児童Ａスクールタクトに地図を取り込み考えを記入したページ (11/5)

児童Ａは、「岡崎市は川が多いためハクセキレイがよく見られるのか」をテーマとして調べた。岡崎野鳥の会の会誌『ハクセキレイ』の探鳥記録からハクセキレイの記録を見つけ、岡崎市の地図へ書き込んでいった。しかし、資料８の赤丸の大平川以外は川での記録はなく「かわのちかくは、あんまりいなさそうだなあ」と川との関係に疑問をもった。そこで、ハクセキレイの生息場所をインターネットで調べる。しかし疑問は解決されなかった。そこで、児童Ａは、野鳥の会の講師に資料９の質問をして、矢作川は大平川、菅生川についで３番目に多いことを知る。さらに、長年のデータの積み重ねにより「むかしと今ではセキレイの見られるじきやいる場所がかわっている」（資料10）と分かるのだと知り、調査の継続性の意義や分析の大切さを感じた児童Ａの追究は、「学区のセキレイマップがどうなっているのか」と

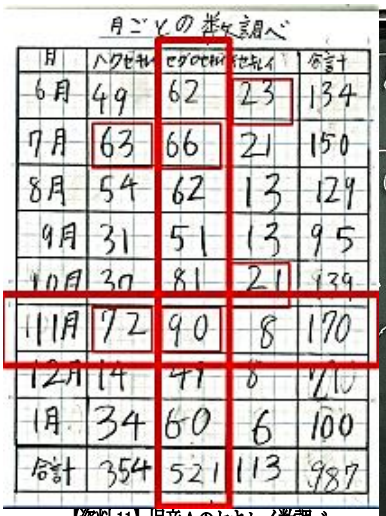


【資料９】児童Ａの質問内容（11/28）

自分達が行っているセキレイ調査に立ち戻り、データ収集やセキレイマップを丁寧に読み取っていくことに力を入れた。そして、月ごとのマップからシールの数を数えて表を作った（資料11）。11月に一番セキレイが多いこと、3種類の中でセグロセキレイが一番多いことを掴む。そこで、児童Aの数調べの表を学級全体で見て、こんな生平をどう思うか尋ねた（資料12）。板書記録の赤線部分「自然があってセキレイがすみやすい」「人に近づくハクセキレイもいて、自然がすきなセグロ、キセキもいてすごいな、すばらしい」という学区の自然環境のよさを捉えた他の児童達の発言から、児童Aは板書青線のように「じゃあ、鳥、セキレイがすきな人は生平に来てくださいって言おうよ。」「生平の11月はすごいですよ。見たい人は11月の生平へどうぞって。」と学区外の人へ発信の意欲をもつようになった。

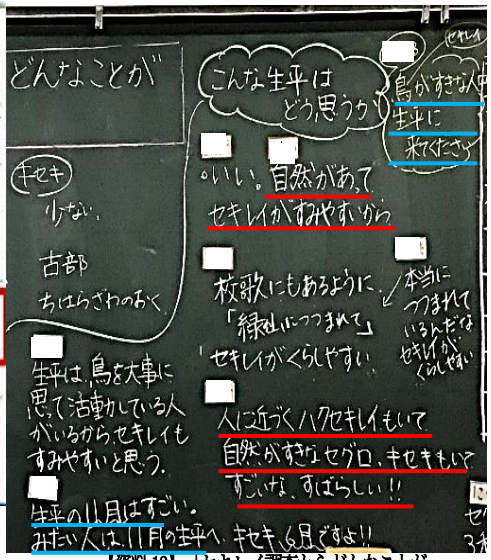


【資料10】児童Aの講師へのお礼の手紙（12/1）



月	ハクセキレイ	セグロセキレイ	キセキレイ	合計
6月	49	62	23	134
7月	63	66	21	150
8月	54	62	13	129
9月	31	51	13	95
10月	30	81	21	139
11月	72	90	8	170
12月	14	41	8	70
1月	34	60	6	100
合計	354	521	113	987

【資料11】児童Aのセキレイ数調べ

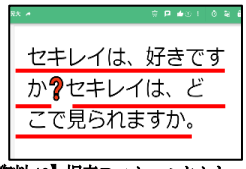


【資料12】「セキレイ調査からどんなことがわかるのだろう」授業板書（2/2）

学習の追究過程で、専門家講師への聞き取りを行ったことで、問題解決を図るとともに、自分の調べを振り返り、新たな視点で追究を深めた。さらに、その追究から地域の自然環境の良さを発信しようとする姿があった。

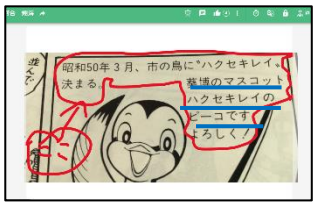
（４）タブレット端末（iPad）を活用した意見交流の工夫（手立て４について）

児童Bは、ハクセキレイが市の鳥なのは「市民に人気があり、かわいいと思っているから」と考えた。そこで本校の児童や教員、地域の人へアンケート調査行った。アンケートの内容決めや集計で授業支援クラウド(スクールタクト)を活用し、得た情報を共有した。

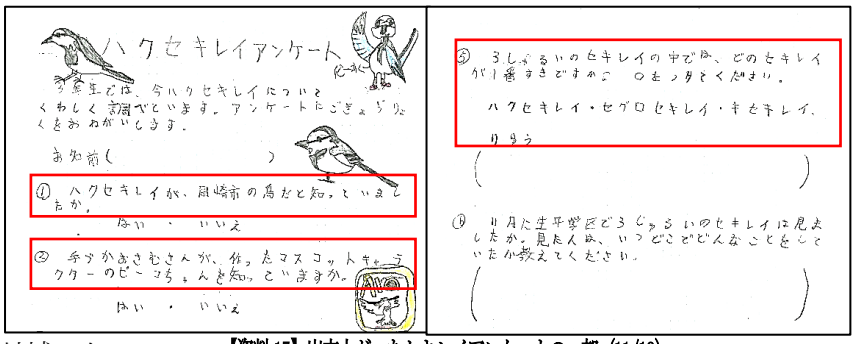


【資料13】児童Bスクールタクト アンケートで聞きたいこと（11/5）

児童Bは最初、資料13の質問を考えた。「セキレイは好きですか」に加え、「どこで見られますか」があるのは、他の質問もしたいという思いである。そこで、共同閲覧モードにして、友達の調べを見られるようにした。児童Bは児童Aから岡崎葵博のマスコットキャラクター「ピー子」の調べを見つける（資料14）。消防署の救助工作車のエンブレムがハクセキレイだと知っていた児童Bは、それ以外のキャラクターに驚き、児童Aに話しかけ、本校の教頭から借りた葵博の資料だと知る。教頭の「葵博と言ったらピー子だった。」という話にさらに驚き「他の先生とか母ちゃんに聞いたらピー子を知っていた。ピー子で市の鳥をアピールしてたのかな。」と情報を集め、アンケート（資料15）にはキャラクターと市の鳥の関係が分かる項目を加えた。また害鳥調べの児童から「セキレイを害鳥と言う人がいるなんて。でも何セキレイかな。セキレイが好きなら何セキレイか書くと思う。」と種類へのこだわりをもち始め、どのセキレイが好きかとその理由も質問項目に加えた。



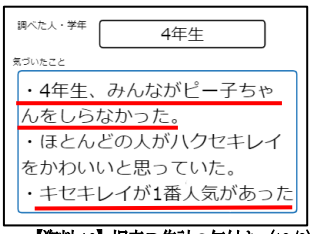
【資料14】児童Bが参考にした児童Aのスクールタクト（11/12）



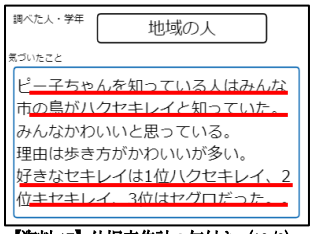
【資料15】出来上がったセキレイアンケートの一部（11/19）

集計は全員で行った。71名分を児童、地域の人、教員に担当を分け、結果と気付いたことをスクールタクトで共有した。４年生を担当した児童Bは、「ピー子を知らない」４年生（資料16）と「ピー子を知っている人は、みんな市の鳥がハクセキレイと知っていた」という他の児童の気付き(資料17)を比べた。そして、71人中70人がハクセキレイをかわいいと答えたが、年代によってかわいい理由が異なることに気付き、「ピー子」と市の鳥との関わりから「みんなに親しまれていてかわいい」と結論付け

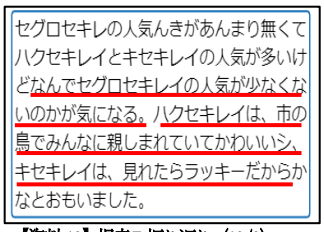
た(資料 18)。また、種ごとの人気調べは、各集計データから「なんでセグロセキレイの人気が少なくない(少ない)のかが気になる」と、アンケートをもう一度探す姿があった。そして、セグロセキレイが日本固有種であることを理由に挙げた回答から、市の鳥にするならセグロセキレイがいいと考え「日本でしか見れないから」を一番の理由として挙げ、セグロセキレイへの思いを膨らませていった（資料 19)。



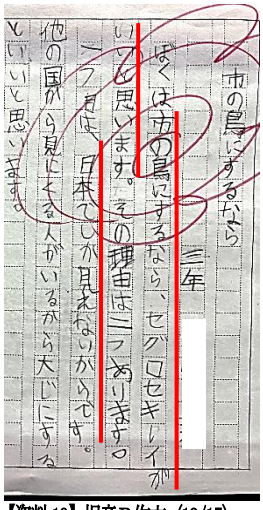
【資料 16】児童B集計の気付き（12/8）



【資料 17】他児童集計の気付き（12/8）



【資料 18】児童B振り返り（12/8）



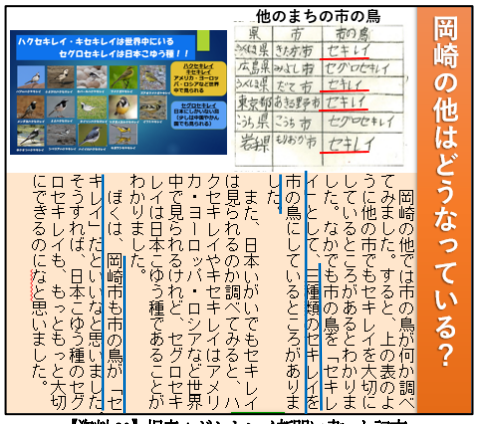
【資料 19】児童B作文（12/15）

（５）社会的発信活動の場の設定（手立て５について）

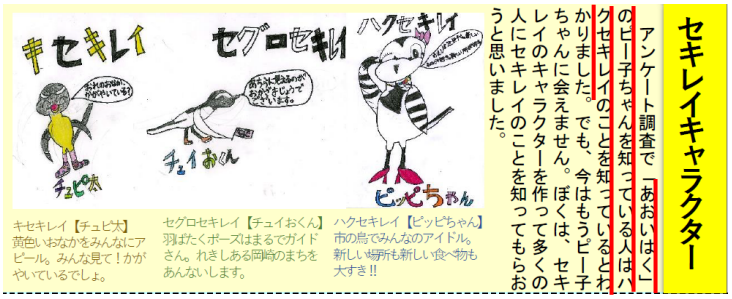
市の鳥に関することや野鳥保護の市の取組などについて、子供達は市役所環境政策課とオンラインで質問や意見交換などをして交流していた。子供達は、市が自然教室や出前授業で自然の大切さを広めていることを知り、自分達の思いも多くの人に知ってもらいたいと考えた。そこでお世話になった市役所環境政策課の方に制作したセキレイ新聞やポスターを持って行き、自分達の考えを提言することにした。

児童Aは、探究過程で他の町で３種類ともすべて市の鳥にしているところがあると発見した。さらに、世界のセキレイについても調べ、ハクセキレイやキセキレイは世界中にいることを知る。日本固有種であるセグロセキレイの大切さを改めて実感した児童Aは、資料 20 の「岡崎市も市の鳥が『セキレイ』だといいな」という思いを、市役所の職員に「岡崎市も市の鳥を３種のセキレイすべてにしてほしい」と伝えた。児童Bは、「ピー子」のようにキャラクターから知ってもらうことが大事だと考え、自分でキャラクターを作り(資料 21) ポスター制作をした。そしてポスターをセキレイ新聞とともに「市役所の多くの人が見てくれるところに掲示をしてほしい」と市役所職員に手渡した。提言後の振り返りで児童Aは、市のホームページに掲載してくれるという発言から「世界中に広まったら、自然を守ってくれる人がいるかなと思います」(資料 22) と、発信からの環境保全を実感した。また、児童Bは市役所職員の生物多様性の話から「セキレイもだけどすべての生き物大切にしたいです」(資料 23) と野鳥保護から野生生物保護へと視野を広げた。

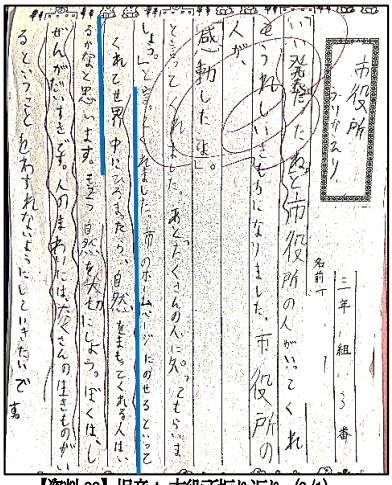
ふるさと学習の単元の終わりに、市役所職員への提言という社会的発信活動の場を設定したことで、岡崎市の人々が今よりもっとセキレイを知って、セキレイや自然を大切にしてほしいという、岡崎市の



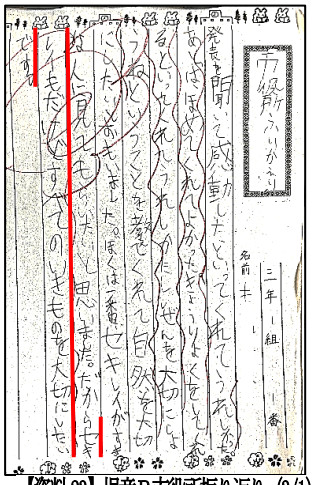
【資料 20】児童Aがセキレイ新聞に書いた記事



【資料 21】児童Bがセキレイ新聞に書いた記事



【資料 22】児童A 市役所振り返り（3/1）



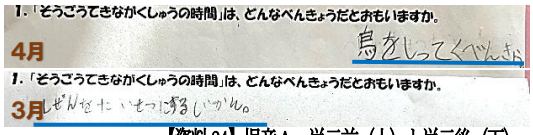
【資料 23】児童B市役所振り返り（3/1）

未来に思いをよせて、自分達ができる環境保全のための発信を、充実感をもたせながら行動化することができた。

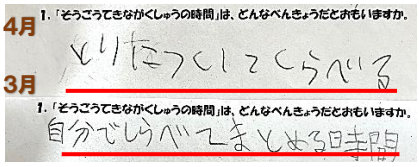
（６）１年間の追究活動の振り返りの場の設定（手立て６について）

単元の終わりに、１年間の追究活動を振り返り考えをまとめた。

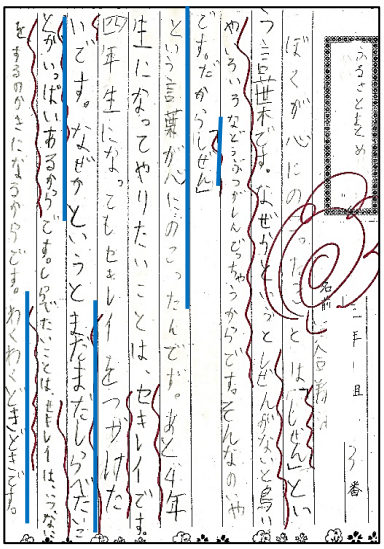
学習ファイルやスクールタクトを見返し、単元の始めと終わりのアンケートを比べた。児童Aは、ふるさと学習について「鳥をしってくべんきょう」から「しぜんをたいせつにするじかん」（資料24）と生態調査から環境保全へと考えが広がった。児童Bも「とりについてしらべる」から「自分でしらべてまとめる時間」（資料25）と、課題解決に向けて自ら進んで追究し、整理分析をして振り返るまでが学習であると捉えた。さらに最後の振り返りでも、児童Aは「『しぜん』という言葉が心にのこった」ふるさと学習を「まだまだしらべたいことがいっぱいあるから」続けたい、「わくわくどきどきです」と自然を大切にする学習を今後も継続していく意欲を示した（資料26）。



【資料24】児童A　単元前（上）と単元後（下）



【資料25】児童B　単元前（上）と単元後（下）



【資料26】児童A　振り返り作文（3/10）

単元の終わりに１年間の振り返りの場を設定することで、自分の成長を振り返り今後の自分を思い描き自然を守っていく取組をしたいと考えをまとめた。

５　仮説の検証と今後の課題

仮説１については、手立て１の学習の始めに自分達で学校内のセキレイ分布調査を行うことで、児童Bが継続観察を行い、児童Aが野鳥と虫との関係に気付いたように、身近な自然環境に目が向き始めた。そして児童Bが家族と自転車で地域調査を始めたように、学校外の野鳥調査へのやる気も高まった。手立て２の老人会や全校児童と分布調査を行うことで、３種類のセキレイの生息域の違いが明確化された。児童Aは「人がいるところがいい鳥と自然がいい鳥がいる」と新たな考えをもち、児童Bは「ほかのまちとかでもどこでみられるのか」と新たな探究へ思いが高まった。よって手立て１や手立て２は、身近な自然環境について関心をもち、課題を見付けることができる子供の育成に有効であった。

仮説２については、手立て３の学習の追究過程での、専門家講師への聞き取りから、児童Aは追究過程で生まれた疑問を解決させた。そして、調査の継続性の意義や分析の大切さを知り、正確な学区セキレイ調査をし、丁寧な分析を行いたいと追究を深めていった。手立て４のタブレット端末の授業支援クラウドを使って情報を共有することで、児童Bは友達の学びから自分の課題に活かせるものを見つけ活用した。また、調査結果の共有から、データを見比べ自分の考えを深めた。よって、手立て３や手立て４は、自ら進んで追究し、よりよい自然環境のあり方について深く考えることができる子供の育成に有効であった。

仮説３については、手立て５のふるさと学習の単元の終わりに、市役所職員への提言という社会的発信活動の場を設定したことで、児童Aは「市の鳥を３種のセキレイすべてにしてほしい」と、児童Bはポスターとセキレイ新聞を「多くの人が見てくれるところに掲示してほしい」と市役所職員に伝えた。そして、児童Aは市のホームページ掲載という新たな広がりに感動し、発信からの環境保全を実感した。児童Bは市役所職員の生物多様性の話を聞き、野鳥保護から野生生物保護へと視野を広げた。岡崎市民がセキレイを知って、セキレイや自然を大切にしてほしいという、岡崎市の未来に思いをよせて、環境保全のための発信を、充実感をもたせながら行動化することができた。手立て６の１年間の振り返りの場を設定することで、児童Aは生態調査から環境保全へと考えが広がった自分の成長を、児童Bは課題解決に向けて追究を続け、思いを行動化できた自分の成長を振り返った。そして、児童Bのように自然豊かな学区にいる将来の自分達を思い描き、これからも仲間や多くの人と協力して、地域の自然を守っていく取組をしていきたいと、考えをまとめることができた。よって、手立て５や手立て６は、地域の自然環境の現在や未来に思いをよせ、自分たちができる環境保全に取り組んでいく子供の育成に効果的であった。

本研究では、個の追究が深まるにつれ、新たな課題を子供達自身で見出し追究を続ける姿があった。学習に没頭していく様子をうれしく思う反面、区切りの付け方や時間配分が難しかった。各教科と連携した綿密なカリキュラムマネジメントを行うことで、子供達がより主体的に追究し行動していけるように改善を図りたい。